

フランソワ・モーリヤック『火の河』における 「火」と「水」の接合

福田 耕介

タイトルとエピグラフ

フランソワ・モーリヤックの小説『火の河』（*Le Fleuve de feu*, 1923）のタイトルの下には、聖書の「ヨハネの手紙一」と、パスカル、ボシュエから取られた三つの文がこの順にエピグラフとして掲げられている。タイトルの由来を明らかにするのが、二番目に掲げられた「災いだ、この三つの火の川が潤すというよりは燃え上がらせる、呪われた大地は」（501¹）というパスカルの文である。ジャン・トゥゾーも指摘しているように²、モーリヤックは「この三つの火の川 *ces trois fleuves de feu*」（501）を単数形に変えてタイトルとしたのだ。

パスカルの『パンセ』においてモーリヤックがエピグラフを取った断章では、冒頭に「すべて世にあるものは、肉の欲、目の欲、あるいは生のおごりである³」という「ヨハネの手紙一」の一節が置かれているが、『火の河』でもこの文が第一のエピグラフとして掲げられている。その結果、少なくともモーリヤックのこのタイトルの頁の並び方では、「肉の欲」「目の欲」「生のおごり」を「この三つの火の川」が受ける形になっている。そして、その三つの川の中でどれがタイトルの単数形の川の主流になったかを示しているのが、「ああ神よ、自然のこの深く恥ずべき傷について、こんなにも優しいこんなにも力強い絆で魂を体に結び付けるこの欲望について、誰が語り得ようか」（501）という、ボシュエから借りた第三のエピグラフである。ここで

¹ 『火の河』からの引用は次のブレイヤッド版による。François Mauriac, *Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, édition établie, présentée et annotée par Jacques Petit, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1978. この作品からの引用に関しては、引用の最後にカッコでくくって、ページ数をアラビア数字で示すことにする。また、この巻から別の作品を引用する時は、書名をPIIと略記してから頁数を示すことにする。なおここでの『パンセ』の訳は、パスカル、『パンセ』、中巻、岩波文庫、2015、p. 285（塩川徹也訳）によった。

² Jean Touzot, « Quand le feu c'est l'eau... » in *François Mauriac 2 François Mauriac et la grâce*, Lettres Modernes Minard, 1978, p 17.

³ パスカル、前掲書、p. 285.

「体」と「欲望」とが語られていることから、何よりも「肉の欲」がモーリヤックの「火の河」を流れていることが推察されるのである。

ただ、この第三のエピグラフでは、「体」は「魂」に結び付けられている。この「魂」と「肉の欲」の宿る「体」との結び付きが、I章のエピグラフの中で、さらに敷衍されている。

「もし、生まれが良くて、時には信心深いひとりの若い娘が、きみがジゼル・ド・プレリを見るところまで落ち得ることを訝しく思うなら、きみの魂のことを考えてみたまえ。きみの魂は、神に熱中しているながら、常に、汚れたことの方を熱烈に愛したのだ。」(503)

エピグラフとして掲げられたこの *avis au lecteur* では、「きみ tu」と呼びかけられた読者もまた自分のことを振り返れば、神を愛することが、汚れたことを愛する妨げにならなかったことに納得がいくはずだ、と主張されている。それを認めるかどうかは読者の誠実さに委ねられているとはいえ、自分が偽善者の立場に陥ることを望まないモーリヤックの愛読者であれば、このことをある程度は真実として容認するに違いない。ジャン・トゥゾーが、モーリヤックのエピグラフに「カトリックの譴責という雷を逸らす避雷針⁴」の働きを見ているが、ここではまさに、これから登場するジゼル・ド・プレリという女性主人公が、信仰があるならそんなにも墮落するはずがない、という読者の疑問を予め払拭する *prolepse* (予弁法) となっているのである。そして、この「魂」と「体」の結び付きや、対立するように思われる信仰と墮落の接合とが、『火の河』の重要なテーマとなるのである。

そのことを、さらに「火の河」というタイトルから考えてみよう。「火の河」の形態をもっとも具体的に表わしているのが、ジゼルがダニエル・トラジスと肉体関係を結んだ時に、彼女の敬虔な保護者を自任するリュシル・ド・ヴィルロンが、「自分が火の河から引き上げ、こんなに長い間引き留め、あの溶岩から遠いところに保っていたこの子供が、またそこに沈み込んだ」

(550) と考えるところに現われる「溶岩 *lave*」である。「火の河」とは何よりも、作中人物を飲み込んで肉体関係へと押しやる炎のどろどろとした流れのことなのだ。また、ジゼルとダニエル・トラジスが肉体関係に踏み出す瞬間には、「私たちはこの血潮の炎に身を焦がす」(547) と書かれていて、「火の河」が体内では、肉欲によって身体を焼き焦がす熱い血液の流れとなるこ

⁴ Jean Touzot, *La Planète Mauriac*, Klincksieck, 1985, p. 115.

とがわかる。いずれにしても、この二つの例では、「河」はもっぱら「火」の流動性を表わして、「水」そのもののイメージは希薄になっている。

「河」の連想させる「水」の流れは、むしろ「火」とは切り離された形で、失われた純潔を蘇生させるイメージを伴って、繰り返し姿を現わしている。

「火」と消火する「水」の接合するタイトルは、肉欲と同時に、それを鎮める無垢を表現する一種の oxymore (撞着語法) となっているとも考えられるのだ。最終的に「火の河」と決まる前に、「失われた無垢 La Pureté perdue⁵」がタイトルの候補になっていたことは、その意味からも重要である。つまり、一見したところでは、肉欲によって失われた無垢の代わりに、その喪失の原因である「火の河」がタイトルに据えられたように思われるが、実際には「火」によって無垢が失われることばかりでなく、「水」によって無垢が蘇生することもまたタイトルが含意することによって変わったのである。

無垢の喪失と蘇生の可能性は、まさにこの作品のもっとも重要なテーマにほかならない。本稿では、女性作中人物に無垢を求めるダニエルの願望について、「火」と「水」の関係を読み解きながら考えていくことにしたい。このテーマについては、本稿の最初に掲げたジャン・トゥゾーの優れた論考(註2)が存在するので、ここでは「火」と「水」がタイトルという枠組みの中で接合していることを対立的なものの接合という観点に展開して、トゥゾーの論文をいくぶんか補うことができたかと考えている。

冒頭の風景における二つのものの接合

『火の河』の冒頭は、タイトルを踏まえたかのような、対立的なものの接合に満ちている。I章の冒頭を読んでみよう。

窓から、ダニエル・トラジスは、草が並木道を貪っているのを見た。[中略]山の生きた横腹は、栗林が花咲いた時の動物的な匂いを発散していた。追い立てられた羊の群れが道に巻き上げる埃からは、羊毛の脂分の匂いがした。(503)

ダニエルは「窓」という内と外の接する境界にいる。出発か滞在延長かという、彼が選びかねている二つの選択肢の接点である。また、彼の見つめる風景の中では、「草が並木道を貪っている」。そこには道を整備する人間の営為と道の境界を曖昧にする自然の力の接点が表現されている。ジゼルを引

⁵ Jacques Petit, « Notice », PII, 1168.

き戻そうとするリュシルの信仰とジゼルを再び飲み込もうとする「肉の欲」の争闘の予兆となっていると考えることが許されるだろう。さらに、「草」が「食る *dévoré*」ところでは、植物に動物的行為が貸与されている。それを受けて、山も寝そべった動物を思わせる「生きた横腹」を見せ、のみならず「栗林」が「動物的な匂い」を発散する。無機物である「埃」さえも、動物の「脂分の匂い」にまわりつかれている。このように、ジゼルと出会う直前のダニエルの眼前には、ひとりの女性の無垢を性行為という動物性によって汚そうとする彼の願望に照応するかのよう、動物性が植物や無機物を侵犯する風景が展開しているのである。

そこに雨が降ると、今度はピレネー山中にパリの情景が接合する。

思いがけない重い雨が、太陽の差す中、葉を強く打ち、それから雨音は止んだ。鳥のさえずりは、いっそう鋭くなった。ダニエル・トラジスが、これほど孤独だったことは一度もなかった。彼は目を閉じて、パリのあの終わりかけた午後の色や香りを自分の中に見出した。初夏のあの雨は、アンリ＝マルタン大通りの葉に生気を与え、木の幹と、碎石を敷き詰めた道路とを黒く光らせるのだ。昨年この時期には、彼の愛人テレーズ・エルランの過去が自分を苦しめていたことを〔中略〕彼は思い出した。(503 - 504)

「重い雨」と「太陽」という対立的なものの接合する天候が、ピレネーの雨からパリの雨を呼び覚ます。すると、その記憶のパリに、テレーズ・エルランが姿を現わす。『火の河』に登場する最初の重要な女性作中人物である。彼女は、夫と子供のいる家庭を持つもう若くはない女性である。『火の河』に限らずモーリヤックの小説では、子供の無垢と女性的な魅力を併せ持つ少女と、若さとその衰えを感じさせる大人の女性という二つのタイプの女性が男性主人公を魅了するのだが⁶、テレーズ・エルランは若さと老いの接合する後者のタイプとして登場し、ダニエルの記憶の中で次第に嫉妬を誘う女性としての失われた相貌を取り戻していくことになる。パリとピレネーの接点に、老いと若さ、現在と過去の接合する女性が呼びさまされるのである。

⁶ 『火の河』においては、マリ・ランシナングが前者の、ジゼル・ド・プレリが後者の女性作中人物となっている。その他に二つだけ典型的な例を挙げておくと、たとえば『悪』(*Le Mal*, 1935)では、コロンプとファニー・バレ、『ありし日の一青年』(*Un Adolescent d'autrefois*, 1969)では、ジャネット・セリスとマリがそれぞれ前者と後者のタイプのペアを構成している。

「清澄さへの奇妙な渴き」

やがて、馬車がジゼル・ド・プレリを乗せて戻ってくる。この時点では、「婦人がひとり降りた。若くて、ヴェールのかかった縁なし帽をかぶっていた」（506）というふうに、顔とヴェールの接触だけが想起されて、彼女の顔自体は描かれない。重要なのは、「プレリ嬢、若い娘」（507）として、彼女が「若い」という特性だけを持ってダニエルの脳裏に焼き付いたことである。まだ言葉を交わしていない彼女のことを考えながら、彼は、ピレネーの「この急流の流れ」、「清流のこの絶えることのない音」に耳を澄まして宗教的な「蘇りと平穏」（507）を感じ取ると、彼女が「若い」という思い込みと「水」との接合から、彼女を彼自身の「清澄さへの奇妙な渴き」（507）を癒す存在として夢想し始めるのである。

「清澄さ *limpidité*」とは、後にマリ・ランシナングがその源にいるとされることから明らかなように、男性の指に汚されていない女性の無垢のことである。それではどうして「奇妙な」のか。ジゼルに接近する手立てを模索しながら、ダニエルが再びテレーズ・エルランを思い起こすところを読んでみよう。

たとえば、若い娘だった時にカブールで知り合った若い男についてのテレーズ・エルランの打明け話は、彼〔ダニエル〕に何週間も殉教の苦しみを与えたのだった。その男は海水浴によって、気分が高まっていたのだと彼女は告白した。（507 - 508）

「海水浴」という肌の露出した状況で、彼と知り合う以前の「若い娘」だったテレーズが、「若い男」と出会う。この「告白」がダニエルをひどく苦しめたのは、彼が夢想せずにはいられなかった当時の彼女の無垢な肌が、彼と付き合い中で蘇らなかったからに違いない。カブールの「海水」には出会いがあるばかりで、ピレネーの「清流」の予感させる「蘇り」が欠けていたのである。夫と子供のいるテレーズを愛したように、ダニエルは彼の出会った女性に単純に無垢を求めているわけではない。むしろ、既に男性経験のある女性と付き合い中で、無垢が蘇ることを望んでいる。無垢ではなく、「失われた無垢」をダニエルは求めているのだ。そこに「清澄さ」を求める彼の「渴き」が、「奇妙な」と形容されねばならぬ理由もあるのだ。

ジゼルと言葉を交わす以前に、この「清澄さへの奇妙な渴き」に思い至ったダニエルは、今度はその渴きの源にいるマリ・ランシナングのことを回想する。ふたり目の重要な女性作中人物である。

ブレリ嬢…… 彼女との関連から、その晩、水を飲んで戻ってきた雌牛たちのために、彼が手ずりに身を寄せていなければならなかった道で、ダニエルの中に、この清澄さへの渇きを彼におそらく最初に呼び起こした女性の思い出が呼び覚まされた。(508)

道の上を雌牛たちが歩いてきたことが、マリ・ランシナングの回想を誘導する刺激となっていることを見落としてはならない。回想を続ける中で、ダニエルがマリ・ランシナングに「雌牛のような目をしないで」(509)と言ったことが思い出されているように、マリ・ランシナングは「雌牛」に似た目を持っているのだ。さらに、ダニエルが「渇き」を抱いているのに対し、雌牛たちが水を飲んだばかりであることも意味のない細部ではない。彼の記憶の中で、水に随伴されて想起されることの多いマリ・ランシナングは信仰に生きる女性であり、雌牛たちの渇きが癒されていることは、マリ・ランシナングもまた癒されていることを浮き彫りにするのである。

マリ・ランシナングの描写としては、「十五歳の時に、作業用の上着が膨らんで窮屈そうだったこの若い娘を前にして、ダニエル・トラジスは、この苦痛に満ちた歓喜に刺し貫かれた〔後略〕」(509)と書かれていることに目を留めてみよう。胸が膨らむという女性的な身体の開花と、押さえつける「上着 *sarrau*」というそれを抑圧する力が彼女の身体において衝突し、二つの対立する力の接点を形成しているのである。ダニエルが「苦痛に満ちた歓喜 *ces délices douloureuses*」をマリ・ランシナングに対して感じるのもそのことと連動している。「彼女は、純真さによって、とても彼の気に入っていたので、その頃、彼はもう無垢ではなかったにもかかわらず、彼女を腐敗させることは自分に禁じていた」(509)のであり、彼女によって呼び覚まされる歓喜は、手を触れることが許されないという禁忌の苦痛を伴わずにはいないのである。

マリ・ランシナングの無垢を汚すことを自らに禁じたダニエルは、ほかの女性に無垢を求める。だが、その場合にも無垢を汚す恐れを払拭できないために、テレーズ・エルランのような経験を重ねた女性に「失われた無垢」を求めることを余儀なくされるのだ。いったん「失われた」無垢が再び見出されるものならば、汚すという考え方自体が意味を失うはずだからだ。

雌牛の持っていた水のイメージは、遊蕩に耽っていた頃の彼が思い浮かべる、修道院に入ったマリ・ランシナングの「うずくまった農民の少女」(511)としての姿に引き継がれている。

彼女が洗っている赤いタイルや、水でいっぱい鉢、壁の石灰の上の十字架像が彼の眼に浮んだ。(511)

修道院の彼女は、「水でいっぱい鉢」に伴われた、「赤いタイル」を洗う少女である。「赤」という色は、タイトルの二つの元素の内の「火」を連想させるものであり、遊蕩に汚れたダニエルが、「肉の欲」である「火」の色を洗い清める少女として彼女のことを思い出しているのだ。一方で、キリストの十字架像のある壁は、白を連想させる「石灰」の上であり、マリ・ランシナングが白と赤の接合するところにいることが明らかになる。その後、ジゼルを思い浮かべる時にのみ、ダニエルがマリ・ランシナングのことを思い出すのも、未知のジゼルがダニエルの中で同じような接点に立つ女性となるからなのである。

ジゼル・ド・プレリにおける「火」と「水」の接合

タイルを洗うマリ・ランシナングの姿を回想した翌朝に、ホテルの受付で話しているジゼルをダニエルが見かけ、ようやく彼女の横顔が次のように描写される。

質素な麦藁帽子が彼女の髪を隠していた。しかし、赤毛に違いなかった。というのも、まだ子供っぽさの残る頬に、そばかすがあって、乳白色なのが見えていたから。ダニエルは、がっちりした首や、やや広すぎるうなじで不意に止まっている髪の毛の短い波を観察した。髪は彼の好みだったのだ。(511)

「赤毛」「そばかす」「乳白色」が重要である。プレイヤッド版のジャック・プティの註にあるように、「そばかす tavelées」は、『上席権』(Préséances, 1921)では、「ミスT…」(PII, 430)というアングロサクソン系の作中人物に与えられていた。『火の河』では、さらに「赤毛」がそのイメージを強めている。ジゼルはフランス人なのだが、外見にアングロサクソン系のイメージをまとうことは、ジゼルと後に登場するリュシル・ド・ヴィルロンという女性ふたりの関係が、同性愛と無垢の交錯する女性同士の友情で結ばれた『悪』のテレーズ・デゼムリーとアイルランド出身のファニー・バレ、『ありし日の一青年』の母親とアイルランド人の女友だちなどの系譜に連なる可能性を秘めていることを類推させずにはいないのである⁷。

⁷ この点に関しては、拙論、「フランソワ・モーリヤックの小説における『最悪のもの』」,

またこの最初のジゼルの描写では、「赤毛」が「短い波 *la courte vague*」となって流れ、まさに「火の河」のイメージを形成している。しかも「波」は「不意に」せき止められて、モーリヤックの小説において男性作中人物からもっとも凝視される女性の身体の一部である「うなじ」を露出させている⁸。ダニエルがそれを「好み」だとするのは、モーリヤックの小説世界の論理では、彼の欲望が掻き立てられていることを意味せずにはいないのである。この最初の描写は、「子供っぽさの残る」ジゼルが、大人の魅力を併せ持つ若い女性であることを予感させているのだ。

彼女の「赤毛」は水の流ればかりでなく、時には「火」もまた表現する。食堂において、ジゼルが鏡を通して彼の様子をうかがっていることにダニエルが気付いた場面を読んでみよう。

女性旅行者の髪は、太陽の光線の中で燃えていた。彼が思っていたほど、すっかり赤毛というわけではなかった。彼には、この暗い炎の色を言うことができなかつただろう。(513)

「炎」となって燃え上がる髪は、ダニエルのことを盗み見るジゼルの内に芽生えた恋心を表に曝け出す。それと同時に、彼女の髪が言い表わすことのできない「暗い炎の色」をしていることが、ジゼルには、ダニエルの思い至らない未知の「暗い」過去のあることを暗示している。「赤毛」は実に雄弁にダニエルに語りかけてくるのである。

最初にダニエルの目にしたジゼルの頬が、「乳白色 *lactées*」だったことも重要である。「乳白色」は彼女の顔に「子供っぽさ」を醸し出すばかりでなく「乳」を介してマリ・ランシナングのイメージであった「雌牛」を連想させる。さらに、後に想起される「乳白色の道 *une piste lactée*」(515)、つまりは天の河の予兆ともなっている。

その後ジゼルと言葉を交わし、いっそう彼女に引かれたダニエルは、彼女が、「この日まで、修道院の中に保護され、視線から守られたマリ・ランシ

『文学と悪』、弘学社、《アウリオン叢書 15》、2015、p. 116 を参照のこと。じじつ、リュシルが、修道院の学校でのジゼルとの関係を回想する時には、ジゼルもまたファニーのように、「愛撫」(550)を好む女性だったことが判明する。

⁸ たとえば『青年の白衣』(*La Robe prétexte*, 1914)では、「私はフィリップが、私の従姉のうなじにじつと視線を据えているのを見た」(PII,148)。また『愛の砂漠』(*Le Désert de l'amour*, 1925)ではマリア・クロスを手に入れることを欲するレーモン・クレージュが、マリアの「髪をそつたうなじ」(PII,859)を腕に感じることを夢想している。

ナングのような少女であってくれたら」(515)と考える。だが彼はそれと同時に、「なぜ彼女を汚すのか」(515)という禁忌の感情を抱かずにはいられない。ダニエルは手に入れようとする女性が無垢であることを望みながら、その無垢を汚すことを恐れずにはいられないという自家撞着に陥るのである。その時、既に触れたように、「乳白色」が今度は天の河に見出される。

彼の頭上の密生した葉がざわめいていた。月の出ていない空の下で、田舎に清流が流れていた。空を、乳白色の道、星々の青白い急流が横切り、うごめいていた。そして、地上と天上とのこの無限の流れは、どんな染みも消えるという考え、水による再生という考えを抱かせるのだった。(515)

ジャン・トゥゾーは「急流 gave」がピレネー山中にも夜空にも存在することに着目し、「諸世界の連帯」ひいては「この世界の一体性⁹」をここに読み取っている。その指摘に付け加えて、「乳白色」もまた地上のジゼルを天空の「この無限の流れ」と「連帯」させていると読むことができるだろう。そのことで「水による再生」がジゼルにまで及ぶことが明らかになるのだ。赤毛と乳白色の共存するジゼルの顔において、タイトルと同じように、肉欲を呼び覚まして無垢を失わせる「炎」と、無垢を再生させる「乳白色」の流れとが接合しているのである。

雨のせいでホテルに閉じ込められたことでふたりの距離が縮まった時に、ダニエルの視点からこのことが再確認される。思っていたほどにはジゼルが若くないことに、ダニエルが気付く場面を読んでみよう。

彼は赤茶けて炎が付いたようなこの〔ジゼルの〕顔を、熱っぽく凝視した。この生きた美しいせつ器〔grès〕を。しかし、口や目の周り、首にさえ、既に磨耗のしるしが表われていた。確かに若いのだが、傾きかけた若さであり、それが彼女を燃やし、水平方向に刺さった矢のように彼女を傷つけていた。(518)

「水」が蘇生に結び付いていたのに対し、「肉の欲」に通じる「炎」は、ジゼルの顔や首などを消耗させ、若さを損ない、年齢を際立たせる。だが、そのことは彼女を若さと老いのはざまにいる女性に変えるだけで、そのために彼女の魅力が減じることはない。ジゼルの年齢を気にし始めたダニエルの脳裏に、再びテレーズ・エルランの記憶が蘇るのもそのためである。戦場にいた1916年の冬や1917年頃の思い出の中心に、当時知り合ったテレーズ・

⁹ Jean Touzot, *François Mauriac une configuration romanesque profil rhétorique et stylistique*, « archives des lettres modernes 218 », Lettres modernes Minard, 1985, p.42.

エルランがいたことが明かされ、「戦争とは、彼にとって、テレーズ・エルランだったのだ」(519)とまで言われるのだ。そこから、生死の境をさまよっていた時に彼の支えとなったのが、人妻で子供のいるテレーズ・エルランであり、無垢のまま保護されているマリ・ランシナングではなかったことが明らかになる。老いに脅かされた女性は、極限状態にいるダニエルにとって、脅威から隔離された無垢な少女以上の力を持つのである。

ダニエルは、単純に無垢な若さに魅かれているわけではない。じじつ、ダニエルが不躰にジゼルに年齢を聞くと、彼女は翌朝になって「26歳」だと年を明かすのだが、その時、彼女の体の内部に、ダニエルは「清流」を感じ取り、彼女の顔が、直視できないほどの「若さで輝く」(520)のだ。のみならず、「昔浴びた日差しで傷んでいた」はずのむき出しの腕が「美しい両腕」に変わり、彼女はその腕を使って「小さな炎を消そうするように髪の毛をうなじに留めようとする」(520)。するとダニエルは、「目の当たりにしたもののために目を閉じ」(520)ずにはいられない。「うなじ」はここでも女性的な魅力を強く発する身体的部位として確実に作用している。若くはないことを明かしたジゼルは「清流」と「炎」の接合を強く感じさせて、たんにマリ・ランシナング的な女性として夢想されていた時以上にダニエルを魅了する。二つの作用の接合がダニエルを魅了するのだ。

ダニエルとジゼルが親しくなっていく過程で、父親のことを話すジゼルとそれを聞くダニエルが、並んで草の上に横になっている場面がある。先ず、「彼は彼女を見ていなかったが、この横たわった体の火で、自分を焼いていたのだ」(521)とあるように「火」がジゼルの体から発してダニエルに作用する。火に焼かれたダニエルは、「水を飲むためであるかのように、彼女の顔の方へ、自分の顔をかがめた」(521)。「水を飲む s'abreuver」のもまたジゼルからであり、彼女が、渴きを与える「火」であると同時に、渴きを癒す「水」もまたたたえていることがここからも確認できるのである。

肉体関係の夜

ダニエルとジゼルがついに肉体関係を結ぶ夜には、「火」が勢いを失い、「水」があたりを鎮めている。先ず、自分の部屋で夜ダニエルが目を覚ました時には、「乳白色の層が、寄せ木張りの床の上や彼のベッドの上を流れ、ドアを白くしていた」(546)。ここで「乳白色の層 Une nappe laiteuse」に使われているのは既に見た lacté ではないが、「lait 乳」をより明確に含んだ

laiteuse であり、ジゼルの頬の色と再生をもたらす天の河、さらには雌牛の目をしたマリ・ランシナングを結ぶ色であることが明確になっている。ダニエルが人の気配を感じてドアを開けると、ドアの下から手紙を滑り込ませようとしていたジゼルが誘われるように中へ入ってくる。彼女の「ぼさぼさの膨れ上がった髪」(546)が彼の目に映じるが、赤毛であるとは全く意識されない。リュシル・ド・ヴィルロンが、本稿の最初に引用したように、ふたりの情事を「火の河」という「溶岩」に飲み込まれることとして想像しているが、実際には、ジゼルの髪の毛の「火」は消え、ふたりは乳白色の河の中いたのである。そこに、ふたりが信仰に向う結末の萌芽があるのだが、敬虔なはずのリュシルが全くそのことに思い至らないのだ。

ジゼルとダニエルが窓際にベッドを挟んで立った時、窓の外に姿を現わすのも「火の河」ではなく、ピレネー山中にいるにもかかわらず、海という「水」の支配する風景である¹⁰。

月は傾いていた。この夏の夜の草原は、海と同じくらい絶え間ないかすかな音を立てていた。清流に愛撫されて、草原の匂いは藻類や海草と同じくらい強かった。(547)

田舎の匂いが、「開いた窓を通して入ってくる湾の息からは、魚や海草や塩のにおいがした」(PII, 466)という『癡者への接吻』(*Le Baiser au lépreux*, 1922)の新婚旅行におけるアルカシヨンの部屋を現出させる。月が傾いたことで乳白色が弱まり、「清流」が愛撫に支配されて、性行為の匂いを醸し出すのである。ただ「愛撫」の主体が「清流」であることに変わりはなく、「愛撫」が汚すものではなく、モーリヤックが『悪』で希求する「許された愛撫」(PII, 699)となることもまた匂わされているのだ¹¹。

ダニエルが、「彼女[リュシル]があなたの救いなのだ」と言ったことでついにふたりは、性交という「深淵」(547)に飲み込まれる。その後には、語り手の一般論が性交の描写の代わりをして、「この血潮の火に私たちは互いに燃え上がる」と肉体の接触が「火」を使って表現される。だが、「火」

¹⁰ モーリヤックの小説の「水」が、肉欲を鎮める無垢に通じているばかりでなく、性愛の呼び水ともなることに関しては、拙論、「子供時代の無垢・性愛・死 — フランソワ・モーリヤックの小説における水 —」、『仏語仏文学研究』, 第17号, 東京大学仏語仏文学研究会, 1998, pp. 119-130を参照のこと。

¹¹ この問題については、拙論、「『許された愛撫』の探究—フランソワ・モーリヤックの小説『悪』について—」、『lilia candida』, 第31号, 白百合女子大学フランス語フランス文学会, 2001, pp. 1-20を参照のこと。

は具体的なふたりの性交から切り離されて、語り手の開陳する一般論の空間で燃えているに過ぎない。

性交が終わって、彼女の体を最初に目覚めさせた男への嫉妬を覚えた時に、ダニエルはリュシル・ド・ヴィルロンに彼が期待していた役割をはっきりと理解する。

ジゼルの無垢が、彼女の失われた無垢が、あの女性 [リュシル] の息吹によって再創造され得ることを、たぶん彼は予感していたのだ。(548)

それこそが、「彼女があなたの救いなのだ」と言った時に彼が予感していたことなのであり、ジゼルの無垢が蘇る予感があったからこそ、彼は性交に踏み切ることができたのだ。リュシルのおかげで、ジゼルはダニエルにとって「不死の若い娘」(549)となる。まずは同性愛を疑い、次いで「救い」となることを確信することで、ダニエルは、モーリヤックが描く女性同士のカップルの両義性を明らかにする。のみならず、ジゼルは、性交の相手であるダニエルと、信仰に連れ戻そうとするリュシルという二つの力の接点ともなっている。二重に二つの力の接合するところにいるジゼルが、そこから解放されて、ひとり救済に向かうことになるのである。

リュシル・ド・ヴィルロンにおける「水」の優位

ジゼルを保護する役割を担ったリュシル・ド・ヴィルロンは、もっぱら「水」を連想させる女性となって、リュシルがジゼルの救いだとダニエルの考えた肉体関係の夜を「水」が支配していたことと連続性を保っている。彼女は、雨の日にホテルに到着し、その夜は、「雷雨の予感で田舎がはりつめていた」(529)。最初にすれ違った時に彼女の身体的特徴として強調されるのが、「薄い青色の両目が、水溜りに、轍の中の空を映す水溜りに、似ていた」(530)ことである。「水溜り」を介して天地の「連帯」が実現し、それに対応するかのように、リュシル到着の翌朝には太陽もまた「嵐の前触れの太陽 *un soleil orangeux*」(530)となって、「水」の支配下に置かれる。朝食時に彼女がジゼルといるところをダニエルが見かけた時には、リュシルは、「無垢な水の視線」を再度彼に向けて、「火の眼 *des yeux de feu*」(531)を持った強い女性を想像していたダニエルの予想を見事に裏切る。教会で敬虔なリュシルの姿を見かけた時にもまた、「水溜りであり、空の小さな広がりである彼女の目にダニエルは引き付けられてさえた」(534)と「水」と空を連想させる

彼女の目が強調され、ダニエルは彼女の敬虔な力に無感覚ではいられなくなり、それが肉体関係の夜に彼女がジゼルの救いだと彼に意識させることになるのだ。

ジゼルが未婚の母であると気付いたダニエルは、ジゼルの部屋に押し込んで、ヴィルロン夫人と出くわす。ダニエルは、彼女がジゼルに同性愛的感情を抱いているはずだと決め付けて「今あなたがどんな人だかわかる」(540)と言い放つが、彼女の「再び晴朗になり、雨の水溜りであり、青空の小さな広がりである目の様子」(540)になだめられて、涙を流すと、「子供の心」を取り戻し、「この[リュシルの]声の母性的な響き」(541)を感じ取る。ヴィルロンは、遊蕩に耽るモーリヤックの作中人物を子供に返す力さえ持っているのだ。ジョゼフ・ジュールが「失われた無垢」とは、男性作中人物が自分のもう持っていない無垢を女性作中人物に求めていると考えて「理想化の投影、愛する女性への移し替え、人生の最初の段階への退行¹²」を語っているものの、リュシルの傍らで「子供の心」を取り戻したダニエルが、それでも「失われた無垢」を見出したとは考えないことを見落としてはならないだろう。「清澄さ」を求めるダニエルは、リュシルという「良心の指導者」(542)の持つ「このあまりに清澄な視線 *ce regard trop limpide*」(543)には耐え難い思いをするばかりなのである。既に述べたように、彼が性愛と無縁な「清澄さ」を求めているわけではないことが、ここからも再確認できるのである。

ダニエルと肉体関係を持ったジゼルをホテルから連れ去り、列車でパリへ向かう時に、リュシルは、既に引用したように、自分が「火の河」から引き上げたジゼルが、再び「溶岩」に飲み込まれたと考えるが、彼女自身は、「火の河」が自分とは全く縁のないものだとしか感じていない。

いったん離ればなれになったジゼルとリュシルが再会する日もまた、リュシルが「水」の女性であることを再確認するかのようになり、ひどく雨が降っている。ジゼルが不意にやってくる前に、リュシルは神の名を口にするが、自分が「冷たい灰の上に」(567)いるとしか感じられない。リュシルの内面の「火」は消えているのだ。続いて、彼女の内面にある「この河」(567)がそこにすぐに潤いを与えるとされるのだが、「火」と結合することがない、自己満足の色彩の強い「河」に留まっている。最後に、ロザリオの音によって祈っている彼女の姿が暗示されて、彼女はこの雨の日に「水」と結びついた

¹² Joseph Jurt, « Figures féminines et perspective masculine dans *Le Fleuve de feu* » in *Cahiers François Mauriac* 13, Grasset, 1986, pp. 180-181.

まま作品から姿を消す。彼女が救いを得るのかどうか小説に描かれることはない。「火」もまた両義的であり、「火」から終始遠い存在であることが、必ずしもリュシルの信仰を確固たるものにしてはいたわけではないのだ。ジャン・トゥゾーの指摘するように、『火の河』は、「恩寵への道における必要な一段階として、肉体的愛を扱っている¹³」のである。

太陽と聖水

それに対して、かつてピレネーで「火」に焼かれた時間を過ごしたジゼルが救いに至る姿は、ダニエルの視点から明確に描写される。ピレネーの最後の夜以降、ふたりは会わずにいたのだが、ダニエルは、熱気球の事故によって引き起こされたランドの山火事を契機として、ジゼルと過ごした最後の晩の「シーツの上のあの月の光」(575)を思い出す。焼き焦がす「火」が、彼の脳裏に月の光の形成する「乳白色の層」を呼び覚ますのは、「あの月の光」が火に焼き焦がされた体を癒す力を持っていたためであるに違いない。彼がジゼルのことを「どんな愛撫からも生きながらえる無垢、太陽よりも強い雪」(575)として思い浮かべるのもそのためである。ジゼルと別れてから、彼はついに愛撫によっても失われない無垢をジゼルが備えていること、つまりは「火」に打ち勝つ「水」をたたえた女性であることを確信するのである。

それとともに、雪を溶かすことのできない太陽の、火を燃え立たせる力が弱まっていく。彼が、ついにジゼルの住んでいる村を訪ねた時には、次のように書かれている。

あのツバメが太陽に引き寄せられるように、ダニエルはジゼルの村に引き寄せられていた。そして彼は五キロの道のりを急ぎ足で帽子もかぶらずに進んだ。空の火に慣れたランド出身の彼には、ヴァロワのこのかすんだ光は気にならなかった。(577)

ツバメとダニエルが比較され、それらを引きつけるものとして「太陽」と「ジゼルの村」が対比されているが、ジゼルの住む村の太陽には「空の火」を思わせるランドの太陽の力はない。そしてそのことが、教会でミサに参加するジゼルによって実証される。

¹³ Touzot, « Quand le feu c'est l'eau... », *op.cit.*, p. 21.

上体を少しかがめて、太陽の一筋の矢が髪に触れていた彼女は、天使の台座にしっかりと固定されていないかのように、揺れ動いていた。(578)

肉体関係の夜に赤毛が意識されなかったように、ここでも太陽の光に触れた彼女の髪に「火」がともることはない。太陽の光はもはや彼女の赤毛を燃え上がらせる力を持たない。それどころか、「天使の台座」という表現からは、日差しが彼女を天に引きよせる力であることさえ感じ取られるのだ。

その時、教会の伝統ある儀式の意義が唐突に理解される。

その土地の教師や荷車引きたちが嘲笑う、威信のない、こうした古い儀式こそが、それでも、これほどの転落を繰り返した後、7回の70倍までも、ジゼル・ド・プレリのような女性を洗い、純潔を無限に新たにすることを保証するものなのだ。(579)

「洗う」という水の作用を教会の古びた儀式が引き受け、マリ・ランシナングが「赤いタイル」を洗う行為の実ったことを読者は了解する。それと同時に、ダニエルは、「そこから失われた若い娘たちの心と体が光り輝いて再び上ってくる」(579) 聖水盤の水に手を浸して、教会から退出する。「失われた無垢」を蘇生させる役割が教会に移り、ジゼルが実質的にはもうリュシルを必要としないことは明らかだ。そのことで、ジゼルの両義性も失われ、そのために、ジゼルの「清澄さ」を望んでいたはずのダニエルは後退し、教会から遠ざかることしかできないのだ。アメリ・フィオンはここにダニエルが回心する教化的な結末を見て、「この結末において、信者が小説家を誤らせたことは明らかだ¹⁴」と書いているが、ダニエルが聖水に手を浸したとはいえ、彼の「失われた無垢」の探究の行き着く先が定かに見えてこないことに変わりはない。ダニエルはまだ愛撫を加えることのできる「清澄さ」を求めている。「火」とは無縁のリュシルと、二つの力の接するところから引き離されたジゼルが作品から姿を消し、ダニエルの彷徨が続くことを予感させて作品は終了するのである。

¹⁴ Amélie Fillon, *François Mauriac*, Société française d'éditions littéraires et techniques, 1936, p. 109.